



小野郷と小野氏

花園大学文学部

教授 芳井敬郎

《小野氏と小野神社》

小野郷は琵琶湖南西部、志賀町の南端に位置し、史跡の多いことで有名な土地柄です。

小野という地名が示す通り、当地は教科書でよく知られている小野妹子と関係があるといわれ、地元の唐臼山古墳は妹子の墓という言い伝えがあります。この古墳は識者によると、珍しい形の横口式石棺墓で、その築造の時期は7世紀前半から中頃であるとされています。また唐臼山古墳の他、小野神社・道風神社の古墳群、大塚山古墳等の古代遺跡が見られます。

妹子をはじめとする小野氏の本貫地がこの里であることは、『続日本後記』巻第三の承和元（834）年2月20日の記述より明らかです。「小野氏の神社は近江は近江国滋賀郡に在り。勅して、彼の氏の五位已上は、春秋の祭りに至らん毎に、官符を待たずして、永く以て往還することをゆる聴す」とあり、この地にある小野一族の神社（氏神）の春と秋の祭りへ、同族の五位以上の貴族は役所の許可を得ずに行ってよいというのです。すなわちこの記述より、この時代には小野氏の主なものたちは当地を離れ、京に住んでいたと考えられます。

小野神社の名が文献に初めて現われるのは『続日本紀』巻第三二の宝亀3（772）年4月29日の記事で、西大寺の西塔が震動したので、陰陽寮が占えば、それは「近江国滋賀郡の小野の社の木」を使って塔を造った祟りであるとしています。すなわち神社の社の木を伐ったからというのです。そこで祟りを和らげるため、小野神社に封戸二戸が寄進されま

した。

小野神社は『延喜式』巻十の「神名帳」下に「小野神社二座」とあり、「名神大社」となっています。近江国滋賀郡では日吉大社と共に、特別な待遇を受けていたのです。祭神はあめたらしひこくにおしひとのみこと天足彦国押人命、たがねつきののおみのみこと米餅搗大使主命、小野妹子となっています。

それに関連する記事が弘仁6（815）年、京畿の古代諸氏族の出自を明らかにした『新撰姓氏録』に見られます。それによると、「小野朝臣、大春日朝臣と同祖、彦姥津命の五世孫、米餅搗大使主命の後也、大徳小野妹子、近江国滋賀郡小野村に家れり、因りて以て氏と為す」となっています。また「小野朝臣、天足彦国押人命の後也」とも書かれています。すなわち小野朝臣は大春日朝臣と同じ祖を持ち、米餅搗大使主命および天足彦国押人命の子孫としています。天足彦国押人命は『古事記』中巻に、五代の孝昭天皇の皇子と記しています。米餅搗大使主命について、小野氏が和邇同族集団の一つであることから、この神は和邇部一族の神格化された先祖と推測されています。

和邇氏は和邇は丸邇、和珥とも書く、古代の有力豪族です。和邇氏はもともと、現奈良県天理市和邇の地にいましたが、それから奈良市春日野町の南方を本拠地とし、春日氏となりました。和邇氏からは小野氏を始め、栗田、大宅、柿本氏等が分立したのです。

小野氏は大和添上郡に住み、山城愛宕郡小野郷・宇治郡小野郷に勢力基盤を持っていました。また、当地に住んだと考えられますが、

平安時代弘仁期の頃には、その一族の主なものは京都に住んでいたといわれています。

《小野氏の人々》

小野氏は代々、逸材を出しました。妹子をはじめ、^{えみし}毛人、^{みねもり}氷見、^{たかむら}岑守、^{みらかぜ}篁、道風等があります。また美貌を誇った小野小町も小野氏の一統といわれています。

小野妹子はその生没年がはっきりしませんが、6世紀末または7世紀初に飛鳥時代の中央官人になったといわれています。妹子は遣隋使として隋の都である長安に行ったことで有名です。遣隋使は推古天皇8（600）年より22年にまで、6度にわたって日本から隋に派遣された使節ですが、妹子は15年、16年に使いとなりました。15年に日本から、『隋書』に見えるとおり、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」と天皇の権威を誇った国書を出したことは有名な話です。16年には高向玄理、学問僧の南淵請安等を伴って行きましたが、彼らは長期間、隋唐に滞在し、多くの知識を得て帰国後、政治や文化の面で活躍しました。

岑守は氷見の子で、妹子の玄孫で、皇后宮大夫、参議兼大宰大貳、そして勘解由長官兼刑部卿の要職を経、天長7（830）年、53才で死去しました。彼はすぐれた詩人で、弘仁5（814）年に完成した、日本最初の勅撰漢詩集である『凌雲集』の選者となるとともに、序文を書いています。また現存する最古の儀式書である『内裏式』の編纂に携わりました。

その子篁もすぐれた詩人であり、『経国集』、『扶桑集』、『本朝文粹』、『和漢朗詠集』にその作品が見られます。『経国集』は淳和天皇の勅により、天長4（827）年に出来上がり、先の勅撰集の『凌雲集』や『文華秀麗集』の脱漏を補填して、もとは20巻からなる漢詩文集です。また、篁は和歌に関しても『古今和歌集』に六首取り上げられています。このように詩歌に堪能な篁も子供時代は異なってい

ました。『文徳実録』によると、篁は乗馬にこり、学問をおろそかにしていたので、父親と似ていないことを嵯峨天皇が嘆きました。それを聞いた篁は大いに反省し、それ以降、学問にいそしんだといわれています。その結果、弘化13（822）年文章生となりました。

篁は承和元（834）年に施行された『令義解』の編纂に加わりました。この書は『養老令』の注釈書ですが、当時、令の解釈に諸説が見られたため、公式解釈を述べるために編纂されました。その年、彼は遣唐副使に任ぜられました。しかし、出発は二度共、難渋して失敗しました。また承和5（838）年、大使の藤原常嗣と仲が悪いため、篁は病氣と称して乗船しなかったため、嵯峨上皇の勘気に触れて隠岐に流されましたが、上皇の特別の計らいで許されて復帰しました。参議にまでなり、仁寿2（852）年、51才で亡くなりました。波瀾万丈ともいえる人生を送った彼は『今昔物語』を始め、各種の説話集に登場します。

道風は醍醐天皇の日記『延喜御記』に見られるとおり、葛絃の子で、篁の孫となっています。尾張国で生まれたという言い伝えが見られます。道風は今日まで能書家といわれてきましたが、『藏人補任』によると、27才の時、延喜20（920）年5月に「能書之撰」、すなわち書のうまいことから天皇の住む清凉殿南庇の殿上の間へ昇ること（昇殿という）を許されています。

能書家の彼（野蹟と呼ぶ）は藤原佐理（佐蹟）、藤原権大納言行成（権蹟）と共に三蹟といわれ、書の第一人者とされてきました。道風以前の書は唐で尊重された王羲之に見習い、いわゆる唐風を第一としていましたが、彼は一歩進めて王羲之の書を日本化した和様の書を創出しました。すなわち柔らかい優雅な書きぶりだといえます。今日の書道界で高い評価を受けている「行成様」の創始者、行成は道風の崇拜者で、その日記『権記』のな

かで道風が夢枕に立って書法を伝授したことを記しています。残存する道風の作品として、中国唐代の詩人白居易の詩文集で、当時の貴族の詩作のテキストとなっていた『白氏文集』を写した『三体白氏詩卷』や、屏風の下書き(土代)の書である『屏風土代』を挙げる事が出来ます。優雅さを誇る平安文化の一つである書の世界で、その代表的人物として道風は高い評価があたえられています。

その他、小野氏には文人として美材、好古等が見られます。篁の孫で、後生の子である小野美材は大内記となり、『本朝文粹』や『古今和歌集』に詩歌が取り上げられています。小野好古は同じく篁の孫で、葛絃の子であり、道風の兄です。彼は天慶3(940)年に藤原純友の乱に際して、追捕凶賊使に任せられ、翌年5月に筑前博多津で打ち破りました。また歌人として知られ、醍醐天皇崩御の奉悼歌等があります。

このように小野氏の人々は代々、能吏や文人としてその名を残しています。

《中世以降の小野郷》

古代において小野氏一族の中心的存在であった小野神社は鎌倉時代になっても小野氏の末裔が歴代奉仕していましたが、南朝側に属したため、北朝によって家職を取り上げられ、小野氏は衰退し、神領も大半がなくなったといわれています。神社蔵の『沿革誌』によると、暦応年間(1338~1342)に近江国守護職佐々木氏が小野なむら篁神社と道風とうふう神社を建造したとなっています。その小野篁神社は小野神社境内の前方にあり、道風神社は小野神社か



小野篁神社



道風神社

ら南に500メートルほど離れた土地に所在します。両社の建物は重要文化財に指定されています。両社共に、檜皮葺の三間社切妻造で、本社である小野神社に比べ、堂々たる建物です。寛文10(1670)年の棟札から篁神社は大宮、道風神社は岡宮と呼ばれていたことが分かります。

小野神社の参道入り口には天台真盛宗の上品寺があり、寺伝では承和14(847)年、小野篁によって創建されたとなっています。これは小野神社の神宮寺であったと考えられます。このような神仏習合に基づく貴重なもの

として、道風神社に保管されている大般若経六百巻を挙げる事が出来ます。その1巻目の奥書から寛元4（1246）年に修理されたことがわかり、この経巻はおそらく平安時代末に書かれたものと思われます。地元では大般若経を大切に保存し、氏子の内の十二人衆と呼ばれる人たちが9月に曝涼を行ってきました。

この十二人衆というのは宮年寄で、男性の年長順に十二人が選ばれます。その人たちの行う主な行事に毎年、11月2日実施のひとぎ祭があります。ひとぎとはしとぎ（染）のことで、水に浸して柔らかくした白米を白で搗いて餅状にしたものです。それを藁苞に入れ、先ず神前に供え、それから決められた三ヶ所の祭場に、それを吊します。各祭場では道を隔てて立てた2本の青竹の間に渡したわら縄に、藁苞を吊り下げます。

現在でもひとぎ祭りを始め、伝統的な生活文化が温存されていますが、他の土地と異なり、小野の地は古代から連綿として歴史を語る事の出来る土地柄であるといえるでしょう。

《参考文献》

滋賀県教育委員会社会教育課編『重要文化財 天皇神社・小野篁神社・道風神社各本殿修理 工事調査報告書』昭和30年

林屋辰三郎・飛鳥井雅道・森谷尅久編『新修 大津市史1 古代』大津市役所 昭和53年
橋本鉄男「小野染祭覚書」『まつりと芸能の研究』I集 まつり同好会20周年記念刊行会 昭和57年

志賀町史編集委員会編（山尾幸久・丸山竜平・門脇禎二・平野邦雄講演）『遣隋使・小野妹子』滋賀県志賀町 平成6年



上品寺本殿

滋賀文化財教室シリーズ No.202号

発行年月日 2002年3月25日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525